

## 踏み跡 < My mountains >

南アルプス前衛	夜叉神峠から鳳凰三山を目指したが	No.058
---------	------------------	--------

夜叉神峠から入って鳳凰三山を縦走してみようというアイデアを思いついた。11月の新雪時に逆方向から縦走したことがあるが、今は二月、雪も多分相当水分を含んでいることだろう。

昭和41年2月21日

甲府着3時15分、バスが出る6時まで待合室で寝ることにしたが、甲府という町は最近東京以上に浮浪者が多い。待合室のベンチも大半は浮浪者で埋め尽くされており、二人分の場所を確保するのに一苦勞。

そこへタクシーの運ちゃんが物欲しそうな顔つきで近づいてきて

「おにいさん、広河原まで5000円でどう？」

「俺は広河原じゃないよ、それより広河原なら3500円が相場じゃねえの？」

「じゃ、夜叉神峠ですか？3000円、2000円……」

「ごくろうさん、そんな金用意していません」

うとうとただけでバスの時刻になってしまった。甲府駅発6時、芦安着は6時50分。桃の木温泉のライトバンをつかまえると、トンネルまで500円だという。ほぼ予定していた額なので、これに乗り込んだ。

霜柱が融けて切り開きの斜面に石を転がし、時には一抱えもあるような岩塊を林道のど真ん中に落とすこともある。何度となく車を止めて大岩を道の端に移動して、また走ることを繰り返す。

夜叉神トンネル口に8時に到着。二人ともうつらうつらし始めた頃に車は終点に到着してしまった。

100mも歩けばトンネルがあり、その向こうには野呂川の流れと白根三山の白い山肌があるはず。

我々は車を降りて夜叉神峠(1760m)への一時間の登り。杖立峠12時40分、大崖頭山(2186.4m)の西側の肩を越える地点で、峠と名がついている。夜叉神峠から杖立峠まで五万分の一の地図上で僅か4cm、標高差500m、たったのこれだけを歩くのに実に三時間を費やしてしまった。夏ならば少々重い荷物を背負っても南御室小屋までは入れるだろうが……。

水っぽいベト雪で樹林帯になると、グイと踏み込めば腰まで埋まることすらある。歩いているというより、雪に穴を開けながら移動しているといった方がぴったりするような、苦しく情けない三時間。雪を運んでいるような重労働にもう脚はだるく、ベト雪の中で食事もできず腹ペコ。大崖頭山まで来ると、正午をはるかに過ぎて間もなく一時になろうとしている。とりあえず昼食をとる。

ここまで三時間を要したとなれば、今日の宿泊予定地の南御室に夕方までに到着することは難しい。まだ雪中ビバークの経験はないゆえ今日無理してもしょうがない。「勇気ある退却」を決意。

初日にここで退却するという事は、今回の山行の敗退を意味する。ストックをついてとぼとぼと夜叉神峠まで下山。下りも楽ではなく、1時間45分かかってしまった。

15時15分、無人の夜叉神荘を今宵の宿として使わせてもらうことにした。まずストーブに火をこしらえ、ベト雪でびしょりぬれた体を乾かしてから夕食の支度。しかし今考えてみると、コースタイムがこれほどにかかる今頃の季節だと「雪中ビバーク覚悟」または「ラッシュアタック」と、いずれも軽装備で行うアタック方式が望ましいような気がせぬでもない。明日はキスリングをここにデポして、サブザックでアタックすることにして17時30分就寝。

昭和41年2月22日

起床6時、カラッと晴れた空、西に白根三山が雪煙を上げているのが見える。荒川岳の東部がわずかに見える。今はいい天気だが、今日は崩れるという予報である。

サブザックに雨具、防寒具、アイゼン、ワカン、ピッケル、ストック。行けるところまで行って戻ってくるのが今日の予定。サブザックで、天気と雪質が良ければ、薬師岳ピストンを十時間で可能ではないか。でも、天気は間違いなく崩れることになっているので、行ける所までという消極的な作戦として、8時に出発。

## 踏み跡 < My mountains >

杖立峠まで一時間。期待を抱かせるようなタイムだが、ここまでは昨日穴を開けて歩いたため歩きやすくなっているだけだ。ここからはまた昨日の二の舞、ワカンをつけて歩くもさしたる効果がないばかりかワカンが雪を頬張ってしまいなかなか歩が進まない。その内に遠望もガスに消え、白根三山の豪快な眺めが忽然と視界から消え、あたり一面乳白色の霧の海。

毎平10時、食事をしているうちに霧の水滴は段々に大粒になり、落下し始めた。もうこれ以上の期待はかけず急いで峠にもどることに決定。10時15分折返し開始。

夜叉神荘に12時15分に帰着。今日もストーブの世話になり、濡れた物を乾かしそれから食事。雨は本降りになり屋根のトタン板がドラミング。

16時30分夕食。明日は帰るだけ、苦勞のない山旅だ。冬山なんかこういうものだろう。サラリーマンがたまの土日に来たって、それが登山に適した日であるかどうかはわからない。

我々がどんな意気で来ようとも自然界の流転はそれとはまったく無関係に動いている。21時就寝。



(左) ベト雪と格闘 (上) 晴れた!白根三山だ!!

昭和41年2月23日

6時起床。昨晚寝たのが21時なので、ふたりとも腫れたまぶたでシュラフから出た。

昨日の大粒の雨はあがり、また白根三山の雪煙が見える。間岳はテラテラと輝いている。

二日間徹底的にしごかれたベト雪を恨むでもなく感謝するでもなく、8時50分出発。

9時15分夜叉神トンネル口、これから登ろうというひとりの男とすれ違ったので昨日までの苦闘の模様を聞かせると一瞬不安げな表情になったが、そのまま峠への道に入っていった。彼の明日、明後日の姿を想像してみる。どう巔頂目に見ても薬師岳の頂上から北岳を眺めている姿は浮かんでこない。気の毒だが「凶」と

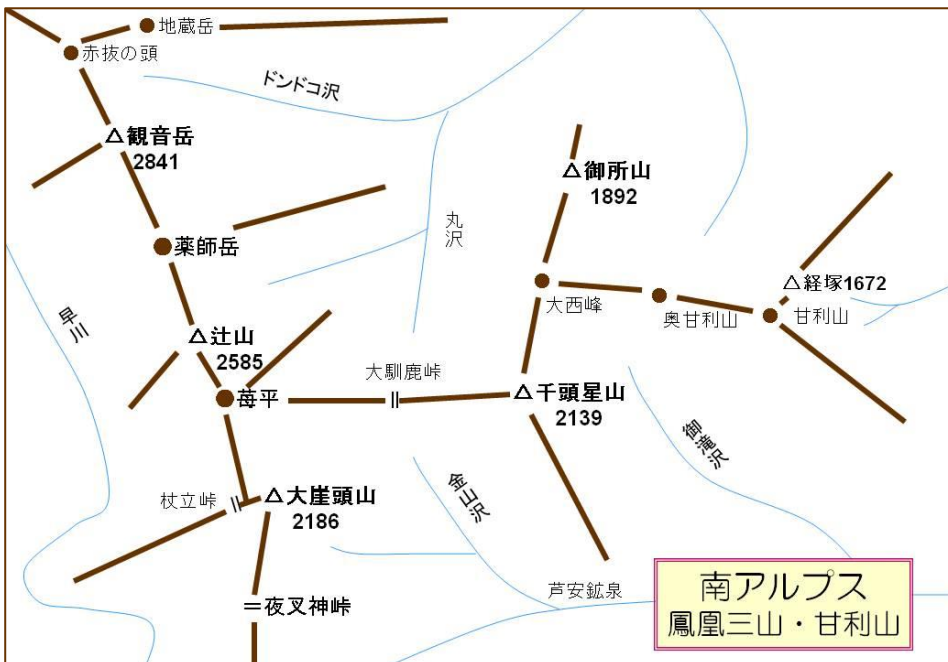
占う。9時30分トンネル口

を出発、林道は遠回りなので直線コースの旧道を下り、芦安へ。

芦安着は10時40分、

11時16分のバスで甲府に出て、12時31分発の電車で帰った。

いかに善戦したといえども、敗北感が先に走り後味が悪い。「人間の自然に対する働きかけに勝敗なんかあるものか」と腹の中で納得させようとするが、どうしても負けたような気がしてならない。



## 踏み跡 < My mountains >

昼飯時の甲府を発ち家へ着くと旨い具合に夕食時という珍しく早い帰還となった。

大自然は神の化身であり、我々の試みの果てが如何なる結果になるかは、尽くした努力への神の裁きに違いない。従って、立てた計画が不達に終わったからには、どこかに尽くし足りぬ点があったということだろう。

そう思って反省することが一歩成長することなのだろうか？

と考えて締めくくることにした。

以上

(修正・更新:2023年 11 月)